

原著論文

呉昌碩が見る重野安繹

— 安田女子大学蔵《寿日本成斎太史詩》を中心に —

王 娜 婷

Shigeno Yasutsugu from the Perspective of Wu Changshuo: Focusing on a Poem for the Birthday of Shigeno (Ju Nihon Seisaitaishi Shi) Collected by Yasuda Women's University

Nating WANG

要 旨

安田女子大学蔵《寿日本成斎太史詩》(図1)は、清末の文人呉昌碩(1844-1927)が日本の漢学者、歴史学者重野安繹(1827-1910)に向けて書いた賀寿詩で、五言古詩の体裁により執筆される。その書は丹念な書きぶりで優品と評して差し支えない。

呉昌碩と重野安繹の間に面識はなかったと考えられるが、その詩文からは呉昌碩が重野について熟知していることが理解され、重野との交友を強く願う姿が見て取れる。本稿では本詩文内容を読み解くとともに、日本側資料と対照して本書の執筆年代を割り出し、また、修辞を分析して重野に対する呉昌碩の認識を検討した。

日清戦争終結後、日本の国力を認識した中国の知識人、文人たちの意識は急速に海外へと向かっていく。海外における書、漢学など中国を起源とする文化の価値を正視し、意識的に取り入れようとする個々の活動

も始まっており、本作は呉昌碩もそのひとりであったことを示すものといえよう。

キーワード：呉昌碩、重野安繹、寿日本成斎太史詩、応酬詩

一、序

安田女子大学蔵《寿日本成斎太史詩》は清末の文人呉昌碩(1844-1927)の手になるもので、彼は「成斎太史」とする人物の生誕を賀して本詩を執筆している。呉昌碩は中国浙江の人で、本名を呉俊、または呉俊卿、字を昌碩といい、とりわけ詩書画印を得意として、「最後の文人」或いは「四絶」とも称される。また、「成斎太史」は重野安繹(1827-1910)を指している。重野安繹は字を士徳とし、日本で最初に実証主義を提唱した漢学者、歴史学者であり、日本最初の文学博士の一人として知られる。

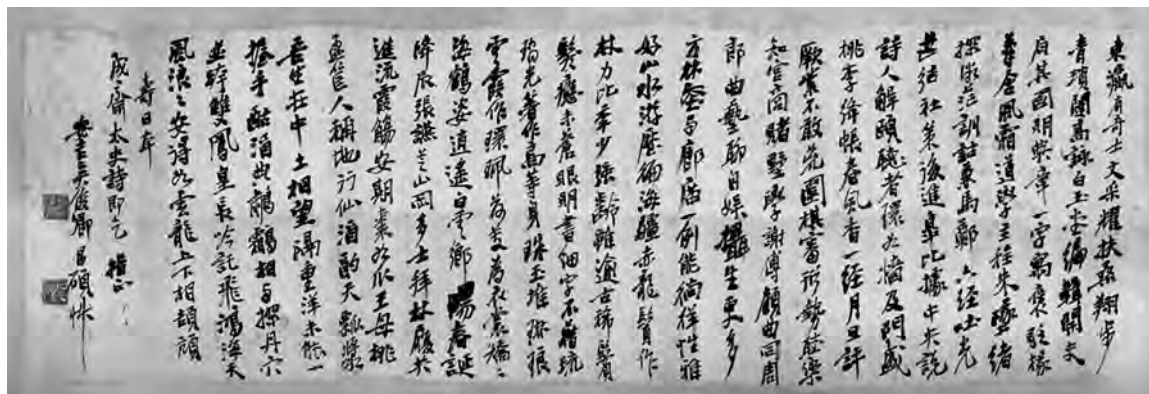


図1 《寿日本成斎太史詩》

呉昌碩は重野に向けて、《寿日本成斎太史詩》を書いているが、両者の文集や詩集の類にはいずれも相手への言及はなく、他の記事を精査しても、本詩を執筆する段階で二人は交流の機会を得ていない。本稿はそうした状況を前提として《寿日本成斎太史詩》の詩文内容を検討し、呉昌碩が重野に対してどのような認識を持っているのか、また、なぜ重野に注目するのかという点を中心に考察する。時代はあたかも清末の混乱期にあり、清では海外に目を向ける知識人も増え始めていた。呉昌碩による本詩、本書の執筆と揮毫、さらに日本における伝存という事実は、清末における日中交流の側面を示すものともいえる。そこで、重野に対する呉昌碩の意識の明瞭化を図るとともに、それを通して本作の持つ歴史的意味をも探ることを、併せ本稿の目的としたい。

二、《寿日本成斎太史詩》の概要

《寿日本成斎太史詩》は紙本の卷子で、全長360cm、本紙24.5cm×77.3cm、五言古詩を記し、本文は25行、落款を含めると全320文字となる。揮毫の書体は行書、楷書を巧みに取り混ぜて丁寧に執筆しており、連綿はほぼ用いない。やや匆卒な書きぶりを常とする呉昌碩の書には珍しい丹念な書きぶりで、書作としても名品に分類して差し支えない。落款部分に、白文の篆書印「呉俊卿印」と白文の篆書印「昌碩」を使用する。本詩末尾の「寿日本成斎太史詩即乞指正」から詩題を取り、本稿では「寿日本成斎太史詩」と呼ぶこととする。

本作にはまた、卷子の最末尾に松丸東魚の号「詩書画印酒堂」印が捺される。松丸東魚(1901-1975)は、名を長三郎、字を子遠とし、日本の篆刻家。卷子を納める紙函側面のラベルには「表装 春峰堂」の印字があり、これに書き込まれた名や表具の状況から日本における装幀と推定される。同作函の表には「呉昌碩賛重野成斎詩」と墨書されるが、筆跡は素朴で、筆者については特定できない。

さて、本詩は全詩五言60句、30聯、全て平水韻の「下平七陽」の韻脚を使用し、五言平韻古詩の詩型を取る。呉昌碩はこの30聯を用いて、重野が史書を編纂すること、学問、弟子を教えること、重野の囲碁と音楽の才芸について、養生法、重野の姿、生誕宴会の様子という八つの部分に分けて順に詠じ、最後に落款を置く。それぞれの構成を示すと次の通りとなる。

1. 第1・2聯-全詩の起句として重野を簡単に紹介する。
2. 第3・4聯-起句を承接して歴史学者としての重野を述べる。

3. 第5・6聯-重野の学問について述べる。
4. 第7・8・9・10聯-教育者としての重野を誉める。
5. 第11・12・13・14・15聯-重野を古代の文人に喩えて、重野の文人趣味を紹介する。
6. 第16・17・18・19・20・21聯-重野の風采・文彩を述べる。
7. 第22・23・24・25聯-仙境における重野の生誕会の様子を描く。
8. 第26・27・28・29・30聯-重野に対する呉昌碩自身の心情を表す。
9. 落款

概観すると、第1部分から第7部分までの内容では、呉昌碩は重野について三人称を用いて述べ、称している。また、第8部分から第9部分までの内容においては、呉昌碩は一人称を使用して自らの感情を直接に表している。本詩の構成上特筆できる点といえる。

三、「寿日本成斎太史詩」の分析

本項では、前項で述べた9の部分に従って順に考察する。

1. 重野の紹介

- ①東瀛有奇士、文采耀扶桑。
東瀛に奇士有り、文采は扶桑に耀く。
- ②翔歩青瑣闥、高詠白玉堂。
青瑣闥に翔歩し、白玉堂に高詠す。

第1・2聯は本詩全体の起句に相当し、呉昌碩は簡単に、また総合的に重野を紹介している。「東瀛」「扶桑」はいずれも日本を指し、「文采」は「文彩」の意を示す。「青瑣闥」は朝廷や宮門を、また「白玉堂」は翰林院を表し、いずれも重野の仕事の場所である太政官正院或いは政府を想定したものと考えられる。呉昌碩は「翔歩」「高詠」の語を用いて、そうした場における重野の堂々たる姿を描くところから説き起こす。

2. 歴史学者としての重野

- ③編輯開史局、其国明典章。
編輯せんと史局を開き、其の国典章を明らかにす。
- ④一字寓褒貶、椽筆含風霜。
一字は褒貶を寓し、椽筆は風霜を含む。

第3・4聯は第1・2聯で述べた重野の仕事に関する事項に続き、歴史学者としての重野について述べている。「椽筆」¹⁾の出典は『晋書』の「王珣伝」にあり、朝廷の重要な公文書、またよい文章の意を表す。ここで、呉昌碩は歴史学者としての重野の文章力を高く評価している。1864(元治1)年、重野は造士館史

局に入り、島津久光（1817-1887）の命令により『皇朝世鑑』を編集している。さらに1875（明治8）年、重野は太政官正院修史局に入って修史局の副長を務め、『大日本編年史』を編修する²⁾。呉昌碩が記すこの2聯は、おそらく重野のこれらの事跡を根拠にしていると思われる。

3. 重野の学問

⑤道学主程朱、墜緒探微茫。

道学は程朱を主とし、墜緒に微芒を探る。

⑥訓詁兼馬鄭、六経吐光芒。

訓詁は馬鄭を兼ね、六経は光芒を吐く。

ここで、呉昌碩は重野の儒学が宋の程朱の学を主として学ぶものであり、訓詁学の分野において、馬融と鄭玄の註釈をよく読み、六経で自分の見解を表していることを述べている。

「程朱」の「程」は程顥と程頤を指す。彼らは宋の理学の学者で、「二程」とも呼ばれ、河南洛陽で自分の学を弟子らに講ずる。彼らの学は「洛学」とも称される。「朱」は朱子を指しており、朱子は福建で講学する。福建は中国の戦国時代から「閩」という名を用いることから、朱子学は「閩学」とも呼ぶ。これについては、小牧昌業（1843-1922）も「東京帝国大学名誉教授従三位勳二等文学博士重野先生碑銘」³⁾に、「先生之学、素奉洛閩」として、重野の学問はもともと二程の洛学と朱子の閩学を奉ずることを述べている。

「馬鄭」は馬融・鄭玄の並称。馬融は後漢の儒学者で、『毛詩』、『書』、『礼』、『易』、『論語』など儒教の經典に注を書く。鄭玄は後漢の儒学者、馬融の弟子で、『礼』、『論語』の注を書き、後に彼の註釈は科挙の重要な参考資料として定着した。「六経」は儒教の六つの經典『詩』・『書』・『礼』・『易』・『春秋』・『楽』を指す。漢以降、『楽』が失われ、漢武帝は五経博士を設置し、現在熟知される「五経」を定めた。これ以降、詩文の中に「五経」がよく使用される。しかし、「六経」の使用もまだ継続され、漢・許慎の「説文解字叙」⁴⁾に「至孔子書六経」とある。

重野の学問については、久米邦武（1839-1931）による次の評価がある。

重野の漢学振も、やはり文章を表となし経学を裏となす、古代紀傳道の学び振で、是よりして国史に貢献された人。⁵⁾

久米は、重野の同僚また昌平黌の同窓で、日本の歴史学者。彼の記述からは、重野の学問の根底は経学にあり、歴史学にも大きな役割を果たしたことがわかる。「経学」は儒教の十三経を中心とし、また十三経の解釈を研究する学問を言う。「紀伝道」は歴史学を指す。

このほか重野の経学について、井上哲次郎（1856-1944）は次のように述べている。

自分は嘗て重野博士から『大日本経解目録』を借りてこれを写し取つたことがある。一体支那では清朝に至つて阮元が『皇清経解』を作り、(中略)丁度これに対するやうな『大日本経解』が出来たならば大変に学界に裨益するだらうと、吾々がかねて希望して居つたところが、何かの話の際に重野博士が自分の所に『大日本経解目録』が出来て居るといふことであつたから、それは拝見したいものであるといふて拝借して写し取つたのである。この『大日本経解目録』は実は寺田弘(望南と号す)の編纂に係り、重野博士の校閲を経たものである⁶⁾。

重野は友人寺田弘（1849-1929）の『大日本経解目録』を校閲しており、これにより、重野の経学に対する知の深さが理解される。呉昌碩が本詩に述べる重野の学問に関する部分は、日本側の記述とほぼ対応しているといえる。

また、呉昌碩は若年の頃、井上の言及にある阮元（1764-1849）を慕っていた。呉昌碩は阮元が創立した詁経精舎に入り、俞樾⁷⁾（1821-1907）の弟子となり、訓詁学を学んでいる。詁経精舎は経学を重視し、許慎・鄭玄を尊んでいた。呉昌碩も重野と同じく経学を好んでいたのだった。

4. 教育者としての重野

⑦結社策後進、臯比拋中央。

社を結んで後進を策うち、臯比は中央に拋る。

⑧説詩人解頤、聴者環如牆。

詩を説けば人は頤を解き、聴く者は環りて牆の如し。

⑨及門盛桃李、絳帳春風香。

及門桃李を盛んにし、絳帳春風香る。

⑩一経月旦評、厥業不敢荒。

一たび月旦評を経るも、厥の業敢えて荒まず。

第7・8・9・10の4聯において、呉昌碩は重野が社団を結んで後輩を指導し、或いは師をなることを述べている。「臯比」は、本来は虎皮を指し、古代中国で虎皮に座って学問を教えたことから講学の席を指すようになった。「及門」・「桃李」・「絳帳」はともに師としての重野を褒める語である。

陶徳民氏は、重野が私塾「成達書院」を開設したことについて、次のように述べている。

重野は明治初年の大阪と明治二〇年代前半の東京で私塾の「成達書院」を開設したが、五経の素読や『文章規範』の授業を行い、読書の際に必ず筆記すること、作文上達のために数十篇の名文を暗記することの重要性を絶えず強調していた。⁸⁾

これにより、重野は1887（明20）年に成達書院を興して、後進への指導を始めたことが分かる。この年重野は60歳であり、翌1888年、帝国大学教授に就任している。

「月旦評」の出典は『後漢書』の「許劭伝」⁹⁾にあり、許劭は毎月1日に人を品評し、転じて人物批評を指す。ここで呉昌碩は重野を許劭に喩え、もしもある人が重野から批評を貰えば、その人は自ら決して学業を荒壊させることがないとの意を表して重野を非常に高く評価している¹⁰⁾。「一経月旦評、厥業不敢荒」の聯は、先の第7・8・9聯で述べた内容、すなわち教育者としての重野を承接して、重野を褒めている。

5. 重野の文人趣味

① 囲棋審形勢、聴楽知宮商。

棋を囲めば形勢を審らかにし、楽を聴けば宮商を知る。

② 賭墅学謝傳、顧曲同周郎。

賭墅は謝傳に学び、顧曲は周郎に同じ。

③ 曲芸聊自娛、撰生更多方。

曲芸して聊か自ら娛しみ、撰生して更に方多し。

④ 林壑与廊廟、一例能徜徉。

林壑と廊廟と、一例に能く徜徉す。

重野の文人趣味について、呉昌碩はまず重野が囲碁と音楽の才芸に秀でることを述べる。「謝傳」は「謝太傳」の略で、晋の謝安を指す。「周郎」は三国呉の周瑜を指す。「賭墅」は『晋書』の「謝安伝」¹¹⁾に出典が見える。謝安は、百万の人を擁して淮淝で軍隊を陣立した苻堅を討伐するよう王に命ぜられ、友人と囲碁をし、別荘を賭けて敵を倒したという。また、「顧曲同周郎」の出典は『三国志』の「呉書・周瑜伝」¹²⁾にある。周瑜は特に音楽に詳しく、曲を間違えば必ず顧みだ。呉昌碩はここで重野を謝安と周瑜に譬え、重野の囲碁と音楽の才芸を高く評価していることがわかる。

重野の才芸について、彼の文集『成斎文初集』¹³⁾の「方円新法序」に、囲碁に関して論じた例が挙げられる。当時の国手本因坊秀甫は自分の碁譜を作り、重野から碁譜の名を請うた。重野はこの碁譜に「方円新法」という名を付け、序文を寄せている。その序文で、重野は日本の囲碁の歴史を紹介し、兼ねて歴代の国手に言及して囲碁の技法の変遷を述べている。ここで彼は囲碁技法の変遷という事実に基づき、新たな技法が古い技法より発達したのではなく、ただ時代や人やいは相手などの状況が変わったことを言った。すなわち、重野は単に囲碁について論ずるのみならず、ヨーロッパを代表する新文化と東アジアにおける従来の旧文化との関係をも共に論述していた。重野は囲碁を

熟知している。同時に、重野は当時の時局についても深い見識を持っていた。

重野の才芸については多くの記述が残されており、先の井上は、重野の昌平饗時代、当時の同窓生の間に「成斎七絶」の伝聞があったことを伝える。その「七絶」とは①学問、②詩（漢詩）、③文（漢文）、④書（書道）、⑤碁（囲碁）、⑥鼓、⑦風采を指す¹⁴⁾。重野の友人、日本の漢学者三島中洲（1831-1919）も重野の多種才芸が身に集まることを述べている¹⁵⁾。

「撰生」は養生をいう。ここで呉昌碩は重野が養生について、独自の方法を多く持っていることを述べる。これについて、日本側にも多くの資料がある。例えば、前出「東京帝国大学名誉教授従三位勳二等文学博士重野先生碑銘」に「平生用意於撰生、年踰七十、康健不異壯者¹⁶⁾」とある。井上による『懐旧録』¹⁷⁾にも重野の「長寿秘訣」つまり養生法が記される。

6. 重野の風采と文彩

⑤ 性雅好山水、遊歷遍海疆。

性は雅だ山水を好み、遊歴して海疆に遍くす。

⑥ 赤龍鬚作林、力比年少強。

赤龍の鬚は林を作り、力は年少に比べて強し。

⑦ 齡雖逾古稀、鬢髮応未蒼。

齡は古稀を逾えたりと雖も、鬢髮は応に未だ蒼からず。

⑧ 眼明書細字、不借琉璃光。

眼は明るく細字を書し、琉璃の光を借りず。

⑨ 箸作高等身、珠玉堆琳琅。

箸作は高きこと身に等しく、珠玉は琳琅を堆くす。

⑩ 雲霞作環珮、荷芰為衣裳。

雲霞は環珮を作り、荷芰は衣裳を為す。

⑪ 矯々海鶴姿、逍遙白雲郷。

矯々たる海鶴の姿、白雲の郷を逍遙す。

ここで呉昌碩は重野の風采を想像している。第17聯で、呉昌碩は「古稀」という語を使用する。「古稀」は70歳の人を指し、「逾」という文字は少々越える意を表す。これに基づくと、呉昌碩が本詩を詠じ、揮毫した時期は、重野が70歳或いは70歳過ぎと判断することができる。すなわち、1897年或いは1897年以降2、3年の間ではないかと推測される。

「箸作」の「箸」は「著」と同じ意を表す。「雲霞」は雲と霞、また雲と霞のような文様をも指し、転じて文学の才能をいう。「荷芰」の出典は『楚辞』¹⁸⁾の「制芰荷以為衣兮、集芙蓉以為裳」にあり、後に「荷芰」は隠士、処士を指す。ここで、呉昌碩はこの典故を使って、重野を屈原のような高潔な処士に例える。「白雲郷」の出典は『莊子』の「天地」¹⁹⁾で、「乘彼白雲、遊於帝郷」とあり、後に「白雲郷」は仙

郷を指した。

注目しておきたいのは、第20聯以前においては人としての重野を誉め、第20聯以降は、「雲霞」・「荷芰」・「白雲郷」の語を使って詩境を改め、人間世界から離れて仙境へと入り、その場面を変換していることである。呉昌碩はここでついに、仙境における重野の生誕会の様子へと筆を進める。

7. 重野の生誕会

②陽春誕降辰、張讌芝山岡。

陽春誕降の辰、讌を芝山の岡に張る。

③多士扞杖履、共進流霞觴。

多士は杖履を扞し、共に流霞の觴を進ず。

④安期棗如瓜、王母桃盈筐。

安期の棗は瓜の如く、王母の桃は筐に盈つ。

⑤人称地行仙、酒酌天瓢漿。

人は地行の仙と称し、酒は天瓢の漿を酌む。

ここでは想像上の話が多くを占める。「陽春」は一般に春を指すが、旧暦10月頃の暖かい時期はまた「小陽春」とも呼ぶ。前述の通り重野の生誕は10月であり、呉昌碩がここで重野の生誕を祝う時期を間違うとは考えにくい。この「陽春」はおそらく「小陽春」を指すのであろう。「張讌」は宴会を開く意を表す。「張讌」は第17聯の「古稀」とを繋ぎ合わせるもので、呉昌碩はこの段にて重野の70歳の誕生日宴会が開催されたことを述べている。

「安期棗」について、『史記』の「封禪書」に「臣嘗遊海上、見安期生、安期生食巨棗如瓜」²⁰とある。「臣」は、李少君を指す。李少君の字は雲翼、前漢の方士とし、不老長生の術を用い、漢武帝は彼を非常に尊敬している。この典故によって、「安期棗」は通常の棗と異なり、その大きさが瓜とほぼ同じということが分かる。中国南方においては、高齢者が健康であることの判断基準として、多く食することができるかという考え方が残っており、呉昌碩が重野の健康を祝している様子が髣髴される。

ところで、重野の70歳の宴会については、重野の息子である重野紹一郎の「亡父の外遊について」²¹に次の記載がある。

父は一度決心した事は必ず実行せねば止まぬといふ気性の男であつた。洋行は父が久しき以前から決心してゐた所であつて、古稀壽筵の席上でそれを公言したが、それ以来常に外遊の機会を狙つてゐたのである……

これにより、重野の70歳の寿宴が確かに開催されたことが分かる。つまり、呉昌碩の「張讌芝山岡」句は、想像のみによつたのではなく、実際に行われた「張讌」の伝聞をもとに書き上げた可能性も考えられる。

8. 重野への呉昌碩の心情

⑥吾生在中土、相望隔重洋。

吾が生は中土に在り、相い望んで重洋を隔つ。

⑦未能一握手、酤酒典鸚鵡。

未だ一たび手を握りて、酒を酤い、鸚鵡を典する能わず。

⑧相与探丹穴、並跨双鳳皇。

相ともに丹穴を探り、並びに双つの鳳皇に跨がらん。

⑨長吟託飛鴻、海天風浪々。

長吟を飛鴻に託し、海天風は浪々たり。

⑩安得如雲龍、上下相頡頏。

安くにか雲龍の如く、上下相頡頏するを得んや。

「鸚鵡」は雁と同じ種類の鳥。本詩の「鸚鵡」は「鸚鵡裘」を指す。『西京雜記』の「卷二」²²に、司馬相如は卓文君のために酒を買いたいが、当時二人の金は足りなかった。そこで、司馬相如は貴重な鸚鵡裘を持って質屋に入れ、酒を得た。「丹穴」は伝説の地名で、鳳凰は丹穴に住むという伝説がある。これらの典故はほぼ恋と関わっているが、中国においては、屈原の「離騷」から、詩人らは詩で自分を美人に例えて、君主を待つという使用例が多く、実際には恋ではなく、自分の学問や才能などを賢明な君主に認められたいとの願望を表す。ここで呉昌碩は第26聯で「吾」という一人称を用いて、これらの典故に自分と重野との関係をたとえ、重野と交友を結びたいという願望を強く表している。

9. 落款

寿日本成齋太史詩、即乞指正。安吉呉俊卿昌碩草。

日本成齋太史を寿ぐ詩、即ち指正を乞う。安吉の呉俊卿昌碩が草す。

「安吉」は呉昌碩の出身地であり、中国浙江省湖州の安吉県を指す。「草」は「草々書いた」との意を示し、自分のこの詩稿はくずして書いたものであるとして、謙遜の意を表している。

四、結

本稿では安田女子大学が収蔵する呉昌碩筆《日本成齋太史詩》を読み解き、日本側の重野に関する記述との比較検討を進めた。その中で、本詩にある「古稀」、「張讌」などの内容と重野紹一郎が記した記事とを対照し、呉昌碩が《寿日本成齋太史詩》を書いた時期は1897（明治30）年以降と推定した。また、全詩30聯のうち、日本側の記述と対応する句が8聯を数え、全詩の約3分の1を占めていることが明らかとなった。こ

これらの点から、呉昌碩は本詩を執筆する以前に、重野の学問、職業、才芸など重野に関する多方面の事を熟知していたことが推測できる。1897（明治30）年頃は、交通や通信手段はまだ不便であり、呉昌碩が重野に関するより個人的な情報について、新聞等の公的な記事から取り入れた可能性は低い。では、どのようにしてそれらの情報を得たのだろうか。

呉昌碩が海外の重野へ宛てて賀寿詩を書いた時期を当時の時代状況と重ね合わせてみると、ちょうど中国が日清戦争に敗北した2、3年後に当たる。この事件によって中国の知識人は日本の国力を認識し、康有為（1858-1927）を代表とする維新派らは、光緒帝を通して戊戌変法を起こすに至る。維新派らはまた、積極的に日本の明治維新後の政治思想や社会思想等を学ぼうとしていた。このような時流にあって、知識人たちの海外への関心は必然的に高まっていった。その多くはヨーロッパを起源とする近代文明に関心を寄せるものであり、中には従来の中国自らの文明の価値を疑う人さえあらわれる。前代にはなかった多様化する価値観の中で、一方に日本の漢学に関する文化人と熱心に交際する知識人たちが登場していた。例として、羅振玉（1866-1940）、陳寅恪（1890-1969）らが挙げられる²³⁾。呉昌碩もこれらの文化人と同様に、北方心泉（1850-1905）や長尾雨山（1864-1942）²⁴⁾等、渡清した日本の文化人たちと交流していた。おそらく呉昌碩は、こうした日本の友人や、自分の中国の友人から重野に関する多くの情報を得ていたのではないかと推測される。

《寿日本成斎太史詩》の詩文内容は具体的で、且つ重野に関する事実と符合した。末尾部分も「吾」を用いて自らの意志を明確に表現し、さらに冒頭にも記したとおり、揮毫されたその書は真摯な書きぶりであり、作品の質も高い。本作には詩書の両面を通し、海外の漢学者としての重野との交友を求めようとする呉昌碩の並々な熱意が込められる。それは明代以降、海禁政策を施行して鎖国状態にあった中国の書人や文人らが、清末に至って初めて海外と積極的に連絡を取り、海外における書や漢学など中国を起源とする文化の価値を正視し、意識的に取り入れ始めた姿として見ることができると推測される。《寿日本成斎太史詩》は、動乱の清末から中華民国へという時代の転換期における日中文化交流の新たな一面を示すものと筆者は考える。

注

1. 『晋書』「王珣伝」にあり、王珣の夢に、ある人が王珣に椽の大きな筆を贈る。その人は、近い将来王珣は必ず重要な文章を書く機会があると予言する。やがて、皇帝が

亡くなり、葬礼の重要な文章は全て王珣が書いたという故事から、転じて「椽筆」は朝廷の重要な公文書、良い文章を示す。『文淵閣四庫全書』、上海古籍出版社、2012

2. 小牧昌業「東京帝国大学名誉教授従三位勳二等文学博士重野先生碑銘」、『重野博士史学論文集』上巻、雄山閣、1938

3. 小牧昌業「東京帝国大学名誉教授従三位勳二等文学博士重野先生碑銘」、『重野博士史学論文集』上巻、雄山閣、1938

4. 『文淵閣四庫全書』、上海古籍出版社、2012

5. 久米邦米「余が見たる重野博士」、大久保利謙編『増訂重野博士史学論文集補巻-重野安繹研究資料集』、pp.28-29、名著普及会、1989

6. 井上哲次郎「重野成斎博士と其の学的業績」、『懐旧録』、pp.45-64、春秋社松柏館、1943

7. 俞樾は、字を蔭甫、号を曲園とし、浙江省德真県の人。清末の古文字学者、金石学者、経学者。呉昌碩、章太炎、井上陳政の師であった。

8. 陶徳民「解説 転換期における重野安繹の思想を記録した貴重な文献-西村天因蔵写本三種について-」、『重野安繹における外交・漢文と国史---大阪大学懐徳堂文庫西村天因旧蔵写本三種』、pp.3-16関西大学出版部、2015

9. 『文淵閣四庫全書』、上海古籍出版社、2012

10. 『後漢書』「許劭伝」に、許劭が功曹として汝南に赴任することを知った汝南の官僚らは、許劭の到着までに自分の操行をよく改めたことが記される。許劭による人物品評の影響を示している。

11. 『文淵閣四庫全書』上海古籍出版社、2012

12. 『文淵閣四庫全書』上海古籍出版社、2012

13. 重野安繹『成斎文初集』富山房、1898

14. 井上哲次郎「重野成斎博士と其の学的業績」、『懐旧録』、pp.45-64、春秋社松柏館、1943

15. 三島中洲「三島中洲翁談「第一の文章家」」に、「博士は殊に才子肌で其多芸に至つては、殆ど他に及ぶものはあるまい、囲碁など〇〇々なもので、故尾崎樞密顧問官とは良い相手であった」とある。西村天因編『先師遺事』所収訃報と追憶談に掲載。陶徳民「重野安繹における外交・漢文と国史---大阪大学懐徳堂文庫西村天因旧蔵写本三種』、pp.186-194、関西大学出版部、2015

16. 口語訳：いつも養生に関することを注意している。年は70歳を過ぎているが、（体は）若い人と同じように健康である。

17. 井上哲次郎「重野成斎博士と其の学的業績」、『懐旧録』、pp.45-64、春秋社松柏館、1943

18. 『文淵閣四庫全書』上海古籍出版社、2012

19. 『文淵閣四庫全書』上海古籍出版社、2012

20. 『文淵閣四庫全書』上海古籍出版社、2012

21. 重野昭一郎、「亡父の外遊について」、大久保利謙編『増訂重野博士史学論文集補巻-重野安繹研究資料集』、p.168、名著普及会、1989

22. 『西京雜記』中華書局、2020

23. 事例として、(1)1896年、羅振玉（1866-1940）は藤田豊八（1869-1929）と共に上海で東文学社を創立した。東文学社は日本語通訳を目指して、学生募集を行った。藤田豊八は日本の東洋史歴史学者。(2)1902年、陳寅恪（1890-1969）は兄陳衡恪（1876-1923）と共に、日本に行き、内藤湖南（1866-1934）と交際した例が挙げられる。

24. 北方心泉は真宗大谷派の僧侶、日本の書人。1877年、1898年の2回、清に渡って、呉昌碩、王韜、俞樾などと交流した。長尾雨山は日本の漢学者、書人。1903年中国

の上海に住んで、友人の紹介により呉昌碩と知り合い、
1914年に西泠印社の社員となった。

[2022. 10. 6 受理]

コントリビューター：富永 一登 教授
 (日本文学科)
 信廣 友江 教授
 (書道学科)

